

薬史学会通信

No. 12 1991年2月

〒192-03

東京都八王子市堀之内1432-1

東京薬科大学内

日本薬史学会事務局

日本薬史学会総会ご案内

— 評議員会も同時開催 —

日時 : 1991(平成3)年4月20日(土) 13:30~

場所 : 東京大学薬学部 3F会議室(文京区本郷7-3-1)

次第 : 13:30~14:00 : 総会・評議員会

14:00~15:00 : 総会講演:

北川千恵子氏(サンド薬品㈱)

「アジア地域における医療史」

15:00~ : 会長就任講演:

16:00~ : 懇親会, 医学部図書館地下食堂

総会にご出席を

— 評議員会同時開催 —

本学会の意志決定機能を持つ総会は、発足当時より日本薬学会年会時に行なわれる習わしであり、旧会則でも、そのように記されてきました。

しかし、本学会も次第に拡大され、研究活動に参加される方が、必ずしも日本薬学会々員に限らず、従って高額の年会参加費を払って入場することに問題が生じて参りました。

そこで、故野上寿・前会長の指導で、日本薬学会年会とは別に、本学会独自の企画で総会を開くことになりました。昨年度に会則を改訂し、昨年4月7日に第1回を、そして本年4月20日(土)は第2回目であります。

本年は、野上前会長のあとを受けて、東京大学名誉教授の柴田承二先生より会長就任の内諾を頂き、この総会の議を経て正式決定される運びになっております。

ご承知のように柴田先生は、天然物化学を専攻され、薬史学との関わりは御祖父に当られる柴田承桂先生が我が国薬学開祖の一人であり、またご自身、日本薬史学会産みの親である朝比奈泰彦先生に師事されて、正倉院薬物の研究にも手を染められました。

今回、野上先生の急逝にあい、本薬史学会の窮状を察して頂き、会長就任を承知されたものでした。会員各位のご参加を待っております。

なお、評議員会も同時に開きます。評議員の方々へは、改めてご案内申し上げます。

薬史研究に関心を

日本薬史学会西部支部が発足した。会員の少ない学会で、北陸・岐阜・愛知以西の西日本全域の会員で構成するが、この地域の会員は、わずか105人。しかも大阪、京都、兵庫の3府県で47人を占め、会員が0または1～2人だけの県が半数を超える。しかし先の設立総会当日には、三重・岐阜・岡山・松山など遠隔地も含め約40人もの参加があり、嬉しいスタートを切った。

残念なのは会長野上寿東大名誉教授の急逝である。故人は支部発足を何よりの楽しみとし、札幌での日本薬学会年会への出席を見合わせてまで支部設立総会に出席し、あいさつするはずであった。遺稿となった故人の発会式でのあいさつ原稿には、“薬の歴史から見て西部支部の発足は当然である。奈良時代の593年には聖徳太子が医薬に関連する四天王寺を建立し、療病院、施薬院を建て薬草栽培も始められたし、薬物の宝庫正倉院もあり、推古帝が薬猟を始められた地でもある。近くは近代医学の幕開けの役割を果たした適塾もあるなど、関西は医薬のルーツ研究の格好の地である。歴史を研究し過去の真実を知らないと、将来の予測も難しい。その意味で西部支部発足の意義は深い”といった趣旨の一節があった。

日本薬史学会は昭和29年斯界の碩学・朝比奈泰彦東大名誉教授を会長として発足した。薬史研究が薬学の進歩発展に大きな貢献をすることは、以前から識者の認めていたところである。しかし薬史研究は個人の趣味に任されており、先輩・有識者の発表の機会や組織もなく貴重な研究成果は埋もれ、また薬学を学ぶ人々は、自分の研究が薬学の中でどんな位置を占めるかという点を見失いがちであった。

そこで薬界が今まで歩んできた道を振り返り、先輩の成果を批判・評価・整理し、新た

な発展に資そうとの趣旨で設立されたものである。以来40余年薬史研究の重要性は次第に認識されつつあるが、薬学教育の中ではまだ日陰の存在で、薬系大学で薬史学の講義をしている例は殆んどない。薬学概論は方々に講義されているが薬史研究にまで踏み込んでいない。支部発会当日の宗田一氏と高島英伍氏の記念講演でも、古典を読みその本質を見極めることの重要性が説かれたが、この面に広く深く思いを致したい。

西部支部は米田該典氏(阪大助教授)を代表とし、山田久雄氏(薬史学会評議員)、藤井正美氏(神戸学院大教授)、幡磨章一氏(薬史学会評議員)を世話人とする支部役員を選び、

(第6ページへ続く)

海外の薬史学会紹介 (3)

H. A. BOSMAN・ JELGERSMA 博士について

山田 光男

先般発行された薬史学雑誌 Vol. 25, No. 2 (1990, 12)84 ページに掲載の英文報告「オランダの医薬品の歴史」に就いて簡単に述べる。

著者の Dr. H. A. BOSMAN-JELGERSMA はオランダ薬史学会会長で、1985年発行の「日本薬史学会創立30周年記念号」(Vol. 20, No. 1)に祝辞およびベネルックス3国の医薬品史の研究についての報告を寄稿して頂いている知日家の学者である。1989年秋、本学会の評議員である名古屋市大・喜谷喜徳名誉教授がオランダに行かれる機会があったので、ライデン大学の教授である同博士へのご挨拶および薬史学誌への投稿をお願いした処、快く引き受けて頂き、この度の掲載となった次第である。

なお、同博士からは、1842年に創立して150年の歴史を持つ the KNMP (Royal Association for the Advancement of Pharmacy) の資料も送られてきている。KNMPによれば薬史研究会が1953年に組織され、約200人の会員がいるとのことである。

(9) 実学の興隆

宗 田 一

元禄・享保期における実学の興隆は、商業経済社会の進展に伴って、貨幣経済が農村に浸透し、農民の商品作物（換金作物）の加工生産品を生み、封鎖的・自給的領国経済の性格を大きく変質させた。貨幣経済の全国化により民衆生活の基盤に立つ内発性の強い技術の発達をこれを促進した。

『農業全書』

元禄9年(1697)成稿の宮崎安貞の『農業全書』は、それまでの農書が農政的立場のものであったのに対し、農民の側に立って、もっぱら栽培技術を説き、それも貢租農業である稲作に重点をおかず、商品作物に多くのスペースをさき、元禄期における商品経済の発展を反映した商業的（換金）農業を説いたものとして注目される。

栽培薬種も巻10に「園に作る薬種」として登場し、21種の具体的栽培技術が記されている。栽培薬種の先進地である山城・大和・丹波等における実地の観察経験と、西日本における老農への諮問を中心とした見聞資料をもとに記述されている。

『大和本草』

有用植物としての三草（木綿、麻芋、麻、藍、紅花、茜根、王葛、烟草、圃、席草、菅の11種）、四木（茶、楮、漆、桑の4種）とならんで薬種の国内自給が農村の経済対策として重視されたことは、10年余り遅れて刊行された貝原益軒の『大和本草』（宝永6年、1709刊）では、さらにその種類を増加している点でもこれがうかがわれる。

『大和本草』には草部の薬類として人参以下77品、木部では樗以下31品に及んでいる。正徳3年(1713)刊の寺島良安の『和漢三才図会』では、全国的和薬（国産薬）の生産状況をみる事ができる。

吉宗の殖産興業策

6代将軍家宣(1662-1712)、7代将軍家継の代に政治顧問として活躍した新井白石(1657-1725)は、実用のための学問という考え方をもってはいたが、つねに武士階級の利益を発想の中心におき、儒教的理想主義者であった。白石を中心とする儒教による文治主義が没落し、それに代ったのが8代将軍吉宗(1684-1751)による、いわゆる“享保の治”である。

吉宗の“享保の治”には、次の3つの画期的薬事政策がとられている。

- 1) 官営薬園の整備・増設と採薬使の派遣
- 2) 国産薬種（和薬）の検査機関「和薬改会所」の開設と流通機構の整備
- 3) 諸国物産（天然物）調査

これら政策は、幕府の殖産興業策の一環としての国産薬物の開発・奨励を前提としたものだった。

官営薬園¹⁾

幕府は、寛永15年(1638)江戸城南（麻布）、北（大塚）に官営薬園を開設²⁾、また2年遅れて同17年京都鷹峯に南北両薬園³⁾を開いている。これらは、偽薬の流通に対処するため、薬種（唐種・朝鮮種）の真偽鑑別とその基原植物の正しい認識をもととす行政機関内部におけるサービスヤード（標本・教育園）を主目的としていたが、享保期に入って整備・拡張、さらに相次いで新設されるようになった官営薬園では、薬種栽培生産研究と薬種の真偽鑑定のための標本確保が、享保期以降の官営薬園の性格だった、といえる。ここで江戸・京都ともに2つの薬園がそれぞれ設けられているのは、幕府両典薬頭（半井と今大路）預りとしたため、その門下の支配によったための配慮である。

享保期の官営薬園として次のものがある。

- 吹上花園：江戸城内の将軍家の御花畑
 - 小石川：貞享元年(1684)麻布の薬園をここに移し、その後数回の拡張を繰り返して、享保6年(1721)拡張整備して東西2区に分け、最大規模の中央薬園としての性格をもつに至った。
- なお、薬園で栽培の薬種は毎年官医に下付することが行われ、享保6年(1721)からは幕府両典薬頭が交互に担当して配分を行うように改められ、原則として12月にそれが行われていた。⁴⁾
- 京都：元禄11年(1698)北薬園が廃され、藤林氏が以降は代々世襲し幕末に及んだ。禁裏への薬種調達の任務をもっていた。
 - 長崎：延宝8年(1680)唐船持渡の薬草木を植える目的で十善寺郷に開設され、元禄元年(1688)岩原郷立山役所内に移り、享保5年(1720)小島村の内天草代官所空地に移転している。
 - 駒場：享保5年(1720)開設、後述の植村政勝(左平次)預り。
 - 久能山：久能村根古屋(静岡市久能)の人参植場を享保10年(1725)薬園とした。
 - 駿府：家康在城時代の御持木林(薬園)を整備拡張して享保11年(1726)開設。
 - 佐渡：奉行所内に開設された特殊薬園で、享保19年(1734)発足。専ら人参栽培用だった。⁵⁾

人参栽培

幕府が貿易決済のために特別鑄造した銀貨(特鑄銀で国内には流通しない。人参代往古銀ともいわれ、主として朝鮮人参決済用だが、他の朝鮮輸入薬種にも適用された)を当ててまで輸入をはかった朝鮮人参は、その輸入量が増大し、銀の流出が年々高まるに及んで、薬用人参の国内栽培が計画された。

対島藩と長崎の清国人商を通じての2つのルートで、それぞれ朝鮮種と遼東種の人参生根と実を入手した幕府は、これを江戸の官営薬園に試植するとともに、佐渡・日光その他

に試植させた。

結実に成功したのは佐渡が早く、享保10年(1725)と記録され、13年には佐渡奉行所内で箱蒔を行い、以後安定した結実を得るに至っている。この技術を安江政一は当時流行の盆栽熱の反映による盆栽技術の応用とみている。

佐渡では、前記のように奉行所内に官営薬園を設け、奉行所役人が管理した小規模生産だったのに対し、日光では農家に栽培を委託し、フィールド(今市・日光間の農村地帯に官営人参栽培場を設置)で行っている。

こうして、薬用人参栽培技術が日本で開発され定着した。和名オタネニンジン(御種人参)は、幕府官製の栽培種朝鮮人参に対し業界側が尊称して呼んだ名称の定着したものだ。⁶⁾

甲州の甘草園

甲州上於曾村(山梨県塩山市)で甘草栽培が行われている事を知った幕府は、享保5年(1720)8月、採葉使丹波正伯を派遣して確認の上、これを免税扱いして幕府保護下で付近の村に甘草園3カ所を設け、栽培管理費用一切を幕府が支給して甘草栽培に当たらせた。同8年(1723)には、採葉使植村政勝(左平次)、松井重康を派遣、同国内6カ所に分植させている。

幕府採葉使

前記の採葉使とは、幕府が国産薬物資源調査のために全国に派遣した役職で、出張の都度、巡行地に御触書を出し便宜をはかるよう指示している。

松井重康の履歴は不詳であるが、阿部将翁との共著『採葉使記』3巻があり、35カ国の天然品107品を記述している。その子の敬が編した『諸国採葉帳』(諸国採葉日記)もある。

阿部将翁(友之進、?-1753)は奥州盛岡の出身で、享保6年(1721)幕府が本草に関する意見を募集したとき応募し、幕府に登用され、『上言本草』の著書がある。

享保5年(1720)から採薬調が開始され、植村政勝、丹波正伯、野呂元丈らが参加した。彼らは何れも伊勢国出身で、松阪かそれに近い地に生まれている。

植村政勝(左平次、1695-1777)は、吉宗の紀州藩以来の御庭番出身で、隠密を兼ねていた。元文5年(1740)吉宗に献上した『諸州採薬記』9巻と、宝暦5年(1755)家重に献上した抄本がある。

丹波正伯(貞機、1691-1756)と野呂元丈(実丈、1693-1761)は町医者出身で、ともに本草を京都の稲若水(宣義、1655-1715)に学んだ同門である。丹波が享保5年(1720)幕命で箱根地区の採薬に出張の折、元丈は招かれて郷里から出向いて行を共にし、江戸に出て幕府に登用された。

ちなみに丹波は、享保7年(1722)下総滝野台(船橋市薬園台町)の官営下総牧場の一角の官地御預りとなって薬園を開き、和薬栽培を主目とし、幕府御用に薬種を納入するほか、残余を市場に出荷するを許されている。和薬改会所

全国的採薬調査と併行して、和薬(国産薬)を全国的流通機構の整備の下に、公認市場に流通させる準備が開始された。その幕府側の直接責任者が丹波正伯だった。

丹波は、享保7年(1722)4月1日に正式に幕府医官に登用され、御留守居役(大久保淡路守組)所属となった。

和薬検査機関の和薬改会所は、全国5カ所(江戸・京・大坂・堺・駿府)に設けられ、検査基準の『和薬種六ヶ條』が定められた。この作成には、丹波の稲門先輩格の京都の本草家松岡玄達(恕庵、1668-1746)が協力している。⁷⁾

なお、享保20年(1735)幕府より発せられ

た「諸国産物令」(諸国江産物御尋)は、稲若水の遺稿『庶物類纂』に対する丹波正伯の増修計画によって発令されたものである。⁸⁾

(注)

(1) 上田三平・三浦三郎編『増補改訂・日本薬園史の研究』渡辺書店(1972)

(2) 宗田一：江戸の官営薬園預りの人びと、医薬ジャーナル27(5)(1991 予定)

(3) 宗田一：京都御薬園(北区鷹峯藤林町)、嶋路ニュースNo.26(1961, 10); 同：東福門院住医官たち、井筒薬品ニュース No.50(1990, 10)

なお、京都の私営官地御預御薬園については、宗田一：嶋路ニュースNo.23(1986, 4)参照

(4) 宗田一：幕府官営薬園の薬種下付、医薬ジャーナル25(3)(1989)

(5) 安江政一：江戸時代の佐渡における朝鮮人参の栽培研究について、薬史誌17(1)(1982); 同：佐渡奉行所内薬園並に人参植付場所について、薬史誌18(1)(1983)

(6) 宗田一：官製栽培種朝鮮人参(オタネニンジン)の販売、医薬ジャーナル27(1-4)(1991)

(7) 『和薬種六ヶ條』作成準備の経緯については、宗田一：近世本草学と国産薬種、『実学史研究I』思文閣出版(1984)参照

なお、案文が典薬頭らの意見を予め求めていた事も判明した〔宗田一：和薬(国産薬)検査補遺、医薬ジャーナル25(7)(1989)〕

(8) 安江政一〔『諸国産物令』について、薬史誌19(2)(1984)〕は「医薬品の行政指導書としての性格が強い」とみているが、この見解は妥当とはいえない。

編集後記：昨90年8月に札幌の地で日本薬学会が開催された後、次の薬学会年会の講演めぐりまで僅か4カ月しかありませんでした。

だが、次ページの如く多数の一般講演々題が寄せられました。野上前会長も本会の発展ぶりに喜んでおられるでしょう。(K)

日本薬学会第111年会 薬史学部会

3月29日(金) 東京薬科大学教育2号館1F

9:36~10:00

29TM9-1 日本薬局方(JP)に見られたエタノールの規格・試験法の変遷
東日本学園大・歯 松本仁人
薬史学会 ○山田光男

29TM9-2 Insulinおよびその製剤に関する薬局方の史的考察(その2) 分析技術進歩の影響
薬史学会 末広雅也

10:00~11:00

29TM10-1 近代日本医薬品産業の発展 その6
JP6公布(昭和26年)よりJP7第1部及び第2部(暫定)公布(昭和36年)まで
薬史学会 ○山田久雄, 山田光男

29TM10-2 大正期, 前期における中国産生薬大黃の輸入に関する変遷について
近大・薬 ○播磨章一, 田中康雄

29TM10-3 薬事法と薬剤師法の変遷について
薬史学会 末松正雄

29TM10-4 薬の携帯とその容器の史的研究(4) 吸湿の概念と防湿対策(江戸時代)
藤沢薬工 服部 昭

29TM10-5 『農業全書』にみられる薬用植物
熊本工大 浜田善利

11:00~12:00

29TM11-1 ツェンペリーの来日とその意義(第9報) 一来日前の医学研究について—
日本ツェンペリー協会 ○高橋 文
東京薬大 川瀬 清

29TM11-2 勝山忠雄・略歴および札幌時代の医療活動
北海道薬大 吉沢逸雄

29TM11-3 北海道初の薬学研究発表をした竹内余所次郎
北海道薬剤師会・札幌支部 本間賢次郎

29TM11-4 星一言語録(その3):「星一の哲学」
星薬大 三澤美和

29TM11-5 岡山県の植物研究者 吉野善介
岡山県 小山鷹二

1:00~2:00

29TM1-1 1940年代初期における「薬学新体制」論議について
東京薬大 川瀬 清

29TM1-2 第二次大戦後の日本薬学会, 日本薬剤師会学術大会の歩み(1)―その分科会を中心に―
薬史学会 金庭延慶

29TM1-3 医薬兼業の西洋医学を伝えた和蘭軍医ボンベと医薬分業の西洋医学を伝えた蘭医エルメレンス(完全医薬分業ができなかった史的考察 第3報)
薬史学会 中室嘉祐

29TM1-4 クリニカル・ファーマシーの歴史と思想 第4報
大阪大・医 環境医学 辰野美紀

29TM1-5 医薬分業はいかなるコンテキストで語られてきたか
中川フォーラム(医療人類学研究会) 松山圭子

—部会招待講演—

2:00~3:00

29TM2-1 新出の医薬関係史料をめぐって―日中伝統医学の分野から―
北里研究所東洋医学総合研究所 小曾戸 洋

3:00~4:00

29TM3-1 中世~近代ルネッサンス移行期における中近東・西欧医薬の一断面 ―ダイエット養生法の絵巻とサレルノ養生訓をめぐって―
明薬大 大槻真一郎

(第2ページより)

会員増強、講演会、見学会などの活動方針を決めた。これを機に若い薬学徒に薬史研究への関心を持たせ、事の本質を見極めるようになるよう、薬史研究のし易い環境を提供する面に活力を発揮してほしい。薬史研究は収入に繋がらず、薬界人として業績評価にも繋がりにくい面はあるが、何とかその意義が広く

認識され薬史研究の輪が広がることを期待したい。(平成2年11月3日発行)

薬史学会々費の納入を

一般(年) 5,000円 学生(年) 2,000円

振替口座 東京 2-67473 日本薬史学会